

④5 『二人の孤児』

和美峠を越えて上州に入った。だらだらと何処までも続く長い坂道を下って、芝の沢で日が暮れ始めた。

左手の神社からはまだ子供達の元気な声が聞こえている。沈もうとする太陽を思いとどまらせるほどの大声である。

鳥居を抜けて男の子が一人、道に走り出て来ると後ろを振り向きざま

「庄屋のバカ息子！遊んでなんかやるもんか」と叫んだ。すると鳥居の奥の方から

「捨て子の拾われっ子の弥四郎なんか、どぶ川にはまっくてたばりやがれ」と声が聞こえた。

「やーい捨て子の拾われっ子、帰れ帰れ！」と追隨する声も聞こえて来る。

ふん、と言って歩き出した男の子にミチが声をかけた。

「喧嘩でもしたの？」

「喧嘩なんかじゃないやい。庄屋のバカ息子が来るとみんな俺のこと、のけ者にするんだ」

「どうしてかな？」

「俺が捨て子だからさ」

「捨て子って、お父さん、お母さんは居ないの？誰と暮らしているの？」

「姉ちゃん」

「お姉さんも捨てられたの？」

「そうじゃない。俺が姉ちゃんに拾われたの」

「えっ、そうなの？お姉さんって年はいくつ？」

「さあ、四十かな、五十かな。それくらい」

「あなたはいくつなの？」

「七歳かな、八歳かな。それくらい」

「だったらお姉さんではなくておばさんかお母さんじゃないの？」

「だって姉ちゃんと呼べというんだもん」

何だか面白そうな関係である。この子の話の通りだとすると、姉ちゃんと呼ばれる四十か五十歳の女が七、八年前にこの子を何処かで拾ったことになる。

「そのお姉さんにはご主人がいるわけだ」

「いないよ。姉ちゃんはずっと一人。今の俺とおんなじ位の時からずっと一人だって言ってた」

「ええっ、七歳か八歳の頃から一人？どうやって暮らしていたの？」

「知らないよ。聞いてみれば。そうだ、おばさんは旅の人？だったらうちに泊まってくれないか？姉ちゃん喜ぶ」

「旅籠なの？」

「そうじゃないけど、姉ちゃんがいつも言ってる。うちみたいな所でも誰か旅の人が泊まってくれないかなあ。そうすればお金が貰える。部屋はあるけど何しろ金が無いって、い

つもそう言つてぼやいてる。どうせ何処かに泊まるんだろ。試しに泊まつてみてよ。」

「本宿まで行くつもりだけど・・・分つた、試しに泊まつてみよう。連れて行つてくれる？」

男の子に声をかけたばかりに予期せぬ展開になつたが、ミチは奇妙な二人の關係に興味が湧いた。

これから本宿まで一里半歩いて歩かなくても、それほど大した問題ではない。それよりも、姉ちゃんと呼ばれる女と男の子の暮らしの方が、何やら面白そうに思えたのだ。

先を歩く弥四郎と名乗つた男の子は、時々後ろを歩くミチを確認するように振り返る。振り返つてはひとこと尋ねる。

「何処へ行くの？」

「江戸よ」

「ふーん」

少し歩くとまた振り返つて

「何処から来たの？」

「長州よ」

「ふーん」

ふーん、と言つたけど長州が何処だか分つていいのかしら、と思つてみると又振り返つて

「お金持つてる？」

「少しならね」

「ふーん」

そんな問答を繰り返して歩く先の山裾に、一軒の家が見えて来た。

短い秋の日が暮れようとしていた。山は色とりどりの装いを競つているはずなのに、家の背後に覆いかぶさるように立ち上がる山は、薄墨を塗られたように明度も彩度も失つて、見上げれば明かりがまだ残る空の下で、早くも眠りに就こうとしていた。

家まで半町ほどの距離になつて、急に弥四郎が駆けだした。姉ちゃんに知らせに走つたようだ。

ミチが戸口に立つのとほぼ同時に、奥から弥四郎に先導されて姉ちゃんが出て来た。

「泊まつてくれるんだつて？有難いんだけど、急なもんで何も仕度が出来てないけどいいかな？」

そう言つた姉ちゃんは、弥四郎が言つたように、確かに四十半ば、ミチよりも少し年上に見えた。

日焼けした顔に大きな黒目がいきいきとしている。年齢以上に活気に溢れているようで、ミチは一目で好感を覚えた。

「取り敢えず入つて下さいな」と言われて敷居をまたいだ家は、梁も柱もしっかりした、一般の農家よりは一回り大きな造りだった。

「ご飯は麦だけど構わない？」

「勿論ですよ。麦が頂ければ立派じゃないですか」

「うちには田が無いんです。山際で田に引く水が無いので

米を作れないんですよ。爺婆や、お父う、お母あの頃は買ってたんだらうけど、あたしにや米を買うお金が無くて。すみませんね。

取り敢えず上がってくださいな。弥四郎、桶に水を汲んでお客さんに出しな！手拭も忘れるなよ」

そう言われた弥四郎は、裏口を出るとほとんど暗闇の中をためらいも無く駆けて水場に行った。

岩の隙間から湧く水が、半分に分った竹を伝って甕に落ちる音がとると聞こえる。

手慣れた手つきで手桶に水を汲む弥四郎は、初めての泊り客を迎えて興奮していた。

ごくたまに、庄屋の威張った爺さんが何やら言いに来るだけで、日頃は姉ちゃんと二人っきりの暮らしである。

その上姉ちゃんが日頃、誰か泊まつてくれりやお金がもらえる、と呟いているのを實現させたことがちよっぴり誇らしかった。

初めての泊り客を迎えて姉ちゃんも張り切っていた。滅多に掃除をする事も無い座敷を弥四郎に掃かせたり、風呂を炊かせたりと、次々に命令するだけではない。

カマドと囲炉裏の間を駆け巡るようにして晩御飯の準備を終えた時には、さあ出来たぞ、と外にも聞こえるほどの大声を出した。

ほかほかと湯気をたてる炊きたての麦が茶碗に盛りあが

っている。

戻したワラビとゼンマイに大豆が入った煮物、大根の味噌汁、それと、これも大根を使った酢の物が添えられていた。

酢の物には干し柿を刻んで入れてある。ゆずを絞った酢だらう、いい香りと柿の甘さがミチをすっかり満足させた。

湯を使って囲炉裏の傍に座ると弥四郎がニコニコしながら寄って来た。

「俺、弥四郎ていうんだ」

「此処へ来る途中でそう聞いたね」

「何で弥四郎ていうか知ってるか？」

「知らない、教えて」

「神社の社で拾われたからヤシロ。姉ちゃんが付けたんだ」

「なるほど、いい名前ね。お姉さんは何という名前なの？」

ミチがそう尋ねると、その声が聞こえたのか洗い物を済ませた姉ちゃんが寄って来て

「私は小夜ていうの。東海道の大井川近くに小夜の中山と

いう茶どころがあるそう。私は行ったことがないけどね。

母親がその出で、私が生まれると遠い故郷をしのんで付けた名前なの」

「弥四郎ちゃんが言ってたけど、小夜さんも七、八歳の頃から一人だったそうですね、そうなのですか？」

「弥四郎、そんな事も喋ったのですか？そうなんですよ、父親が死んで二年後に、私が八歳の時に母親まで死んで、そ

れから弥四郎を拾うまでずっと一人。」

「八歳の一人暮らしなんて全く想像も出来ませんが、何とかなるものですか？」

「何とかなるといふか、何とかしたといふか、十三、四才くらいまでは鍬を振るのも覚束なかったのでそりやあ大変でしたよ」

小夜は、前掛けで手を拭きながら囲炉裏の傍に寄ると、僅か八歳でこの家を守って来た苦労話を始めた。

元々地下の人間ではなかった先々代が、庄屋の許しを貰って小屋を建て、住み着いたのがこの土地だった。

この周辺は芝の沢と呼ばれる地域で、しもの方には綺麗な沢が三ヶ所もあるのに、住み着いたこの場所には水が無かった。

崖の隙間に僅かに滲む水を見つけ岩を砕いてみると、藁の芯ほどの太さで落ちる水が窪みの奥に流れ込んでいるのがみつかった。その水を、竹を使って手許に流れ出るようににした。その水が暮らしを支えたのだ。

土地は痩せていて、野菜ひとつ育てるのも中々容易ではなかった。蕎麦と粟が暮らしの支えだったが、試しに裏の山を開いてりんごを数本植えたのが上手く行った。

丹精した甲斐があつて、十年後には少しずつ実をつけ始め

た。収穫したりんごは、背中に担いで追分や下仁田、時には松井田まで運んだ。

毎年何本かの苗木を植え足し、やがて収穫したりんごは荷車で何度も運ぶほどになった。

そして、やつと親の代になって小屋の暮らしを抜け出し家を構えたのだが、何年も住まないうちに親達は次々に死んでしまった。

村の衆が集まって母親の葬儀を済ませた仕上げの席で、庄屋が

「この家にはわしの倅夫婦を住ませよう。この娘は二人の養子にする」と言い出した。

その言葉を聞いた小夜は狂ったように泣き叫び、庄屋も村の衆も追いついてしまった。

父親と母親が苦労の末に建てた家。しかも、末代まで続くようにと、材料も吟味に吟味を重ね、仕上がった時に父親が

「この家は小夜に継いでもらわんとあ」と言っていた家である。真つ赤な他人の庄屋の息子夫婦に何でくれてやる必要がある。

子供が一人で住むことなど出来る筈も無いし、りんごの面倒も見る事が出来ないのだから、と言いくるめようとする大人達を、箒を振りまわして追っ払った。以来一人で暮らしを来た。

それ以後も、何やかやと言って来る庄屋を、その度に小夜

は竹竿を振って追い返した。

だけどそんな小夜にも不安が無いわけではなかった。実際、りんごの手入れなどは全く小夜の手には負えなかった。

それだけではない。藏には親が買い入れた二俵余りの米や味噌樽、醤油の甕などが残っていたが、それらを喰い尽した後は一体どうなるのだろうか。

秋になって、りんごの収穫の時期になった。木に登って手の届く範囲のりんごを収穫してみた。だが、折角りんごを収穫してみてもそれをどうする当てもなかった。

小夜は、来る日も来る日もりんごを食べて米の消費を減らす手だてにした。

冬が来て粉雪が舞う寒い日だった。締め切った家の戸口に人の気配がした。

またしても庄屋のじじいが懲りずにやって来たか、と思つた小夜は、用心の為に台所の脇に立て掛けてある竹の棒を握り締めるとそつと戸口に近づいた。

すると、戸の向こうから聞こえて来たのはお経のようだ。じつと耳を澄ましてみると、間違ひなく太く重々しい声で念仏を唱える声が聞こえて来た。

そつと心張棒を外し恐る恐る戸を開けてみると、黒染めの僧衣をまとつた行乞の若い僧が一人、目を瞑つて熱心に念仏を唱えていた。

こんな時はどうすればいいのだろうか。小夜が大急ぎで過去

の記憶を辿ってみると、たしか母親は僧侶が手にしていた鉢に米を入れてあげていた。

「ちよつと待つてください」と言つて小夜は奥に駆け込みりんごを一つ掴むと、再び僧の前に駆け寄り僧が手にしている鉢の中に米を入れた。そして

「本当はお米を入れるのですが、私の米が無くなると困るのでりんごで許してください」と言つた。

僧は念仏を終えると大きく腰を折つて辞儀をし、小夜に背を向けた。そして一步を踏み出そうとした足を止め、くると向きを変えらるともう一度小夜に向き直つた。

「いま私の米が無くなる、と言いましたか？」

「はい」

「まさかとは思いますが、あなた一人で暮らしているのではないでしょうか？」

「春にお母あが死んでから一人です」

「この歳で、ですか？親戚とか近くの人達は助けてくれな

いの？」  
「親戚は遠いし、村の人は、お父うが一所懸命建てたこの家を盗ろうとするから嫌い。私は絶対にお父うの家を守る。お父うと約束したから」

「ほう、それは凄い。しかし一人で生活するのは大変でしょう。私の米が無くなる、と言つたのは、蓄えが少しはあるのでしょうか、無くなった先のことは考えましたか？」

「・・・」

僧は俯いた小夜の肩に手を置くと、

「あなたの年では難しいでしょうね」

そう言って暫く考え事をしているようだったが

「私は、今日はこのまま帰ります。でも月が代わったらもう一度来ます。それまで一人で大丈夫ですか？」と問うた。

俯いたまま小さくうなずく小夜の肩を軽く叩いた僧は、しつかりね、と言いついて粉雪の中を去って行った。

その後ろ姿が雪に紛れて見えなくなるまで見送った小夜は、魔法にでも懸けられたように、暫く開いたままの戸口に立ち尽くしていた。

そして月が代わった。だけど年が代わる頃になっても僧はやって来なかった。

何があるのか分からないが何か新しいことでも起こるのだろう、と期待をしていた小夜は、毎日何度も戸口を確認した。だけど僧は来なかった。

きつと、気付かない内にやって来たに違いない。りんご畑で、木から落ちてでもまだ食べられそうなりんごを探している間にやって来て、誰も居ないので帰ってしまったのだろう、と考え、すっかり諦めてしまった一月の中頃だった。

小夜は母親がやっていた事を思い出して、秋に蔵に残っていた種を蒔いた大根がそれなりに育ったのをこの日も収穫した。昨日抜いたのを併せると五、六十本にもなった。

それを裏の水場で綺麗に洗っていると戸口で、ごめんください、と男の声が聞こえた。

瞬間、戸を閉め忘れていた事に気付き後悔したが、庄屋のじじいは、ごめんくださいなどは言わない、誰だろうと思つて戸口を窺うと、そこにはいつかの僧が、もう来ないのだろうと諦めていた僧が、にこやかな顔で立っていた。

「約束していたのに思いがけない用事でひと月も遅くなつてしまつてごめんください。元気にしていましたか？」

そう言つて僧は近づいた小夜の肩に優しく手を置いた。

小夜の胸は、一気に破裂しそうな嬉しきで一杯になった。大声で泣き出したくなるのを懸命にこらえ、こくりとうなずくのがやつとだった。

「大根が植わつていたようだけど？」

「それを裏で洗っていました。今から干すところですよ」

「ほう、それは偉い。だけど、鍬を振るうのは苦労だったでしょう。よくやりましたね、驚きました。」

この前にあなたの話しを聞いて、水が無いので米は無理でも麦なら育てられるのではないかと思ひ、今日は麦と大豆を少し持つて来ました。

下の草地の様子だと、耕せばあなたが食べる一年分くらいの麦が穫れるはずですよ。最初に耕すのは特に骨が折れますが、それは私がやります。次からはあなたが耕すのですよ。

年々体も大きくなるでしょうから次第に楽になりますよ、

二年三年は本当に大変だと思えます。でも、お父さんの家を  
守ると決めたのだから、辛いでしようが頑張ってくださいね。

今年は夏前に先ず大豆を蒔きます。神社の境内に大きな八  
重桜の木がありますね。あの花が終わる頃でいいと思います。

秋になって大豆が枯れたら収穫をし、すぐに麦を蒔きます。  
麦の芽が出て冬の間は霜柱で根が浮いてしまうので、踏  
んでください。いいですか、春までに四、五回は踏むのです  
よ。そして夏前に収穫をすると畑を耕して今度は大豆を蒔き  
ます。この繰り返しです。」

そう言った若い僧は、小夜の家泊まり込んで六日をかけ、  
毎日鋤を振って草地を畑に耕した。

落ちて腐りかけた沢山のりんごを、種を抜くと肥料になる  
と言って畑にすき込んだ。

小夜も、次々に出て来る石を拾っては一ヶ所に集めた。朝  
から手許が見えなくなるまで二人で耕し、完全とは行かない  
までも、何とか種を蒔けるところまでの仕事を終えた僧は

「次に私が此処に来るのは恐らく秋になります。麦を蒔く  
頃になるでしょう。それまで元気でいてくださいね」

と妹か娘に話しかけるように優しく微笑むと、念仏を唱え  
ながら明けきらない道を遠ざかっていった。

「それ以来、うちのご飯は麦と大豆。

秋にはまた来ると言ったお坊さんはそれっきり来てくれ

なかった。また会えると信じて楽しみにして待っていたけど、  
前のようにひと月くらい遅れて来てくれるんじゃないかと  
も思ったりしたけど、とうとう来てくれなかった。

どうしたんだろうね。何か有ったんじゃないかと子供心  
にも毎日心配で眠れなかった。だって世の中でたった一人の  
私の味方だったんだもんね。

でもね、今になつてみると、たった一度私の前に現れた本  
物のお釈迦様だったんじゃないかと思えるんだ。

だって、縁もゆかりも無い小娘の為に草地を畑に耕してく  
れる人なんて、滅多に居るもんじゃないよ」

小夜はそう言って、涙の浮かんだ顔を前掛けで拭いた。  
「りんごは今でも採れるのですか？」

「それがね、りんごはさすがに子供の私の手には負えなか  
ったよ。毎年伸びて来る葛に覆われて家の傍の二本以外はみ  
んな駄目になってしまった」

「それは残念なことでしたね」  
「爺様の代からの、苦勞の賜物だったのにな」

「弥四郎ちゃんとは何時出遭ったのですか？」  
「三十六の年に、厄年だ、ていうんで朝早くに一人で神社  
に参ったところお社の隅でこの子が泣いていてね。

生まれてまだ半年かそこらだったろうと思う、絹の着物に  
包まれていたから、ひよつとするとお侍の子どもかも知れな  
い。何かわけが有ったんだろうね、きつと。

抱き上げてそこらじゅうを探してみたけど誰も居ない。当分待つてみたけど誰も現れない。

これは絶対に捨て子だと判ったら、これもお釈迦様が一人暮らしの私に贈り物をしてくれたんじゃないかと思つて喜んで連れて帰つたけど、子供を産んだことも育てたことも無い私にや毎日がそりや大変だった。

おまけに弟も妹もいなかったんで、赤ん坊を育てるところを見た事も無い。

食い物だつてうちには麦と大豆しか無いので、麦を石臼で挽いて粉を作り、それを重湯のように煮て飲ませたものさ。

うんちをしてもおむつを当ててやることも知らなかったから、そりやあもうてんやわんや。

でもね、弥四郎て呼ぶと小さな手と足をバタバタさせてキヤッキヤツて笑つて応えてくれるのさ。もう、可愛いつたらなかつた」

黙つて小夜の話聞いていた弥四郎が

「姉ちゃんには色々苦勞をかけたんだな」と呟いた。

「そうさ、有難く思えよ」

「うん、ありがと。肩もんでやるよ」

「ははは、ありがと。でも今度でいいや」

「俺、姉ちゃんみたいに一人で暮らすなんて出来そうもない。寂しくて泣いてしまう」

「お前も私も二人ともおんなじ孤児さ。だからこれからも

二人で仲よくやろうや。お前を産んだわけでも何でもないから、お前のお母あでもない。年が離れた姉ちゃんなんだよ。分つたか？」

「ふーん」

弥四郎が気の無い返事をした。目が虚ろになっている。どうやら眠くなつたようだ。

「こら！まだ寝るんじゃない。湯を使って来い、湯を！その前に戸締りだ。」

「うん、分つた」と言つて立ち上がった弥四郎を見送つて小夜が

「私はまだまだ元気で居ないとね。弥四郎に私とおんなじ苦勞をさせたくないし、孤児一人でこれからも頑張らなくちゃいけない。

昔を思い出して色々話したけど、初めてこんな話をしたらものすごく体が軽くなつた気がする。

今日もきつとお釈迦さんのおかげ、ありがたい、ありがたい」

小夜は潤んだ目をミチに向けると、少しはにかんだ様子でニコツと笑つた。



